

中途視覚障害者のすみ字訓練

日本ライトハウス

坂 本 美磨子

I. すみ字訓練の意義及び目的

すみ字訓練をすでに20年続けているが、毎学期新入生を迎えるたびに、目的より先に「すみ字」という言葉の説明をすることにしている。我々視覚障害者関係の間では通用する言葉ではあるが、わざわざ墨をすって筆で習字をするのかと、びっくりする人も少なくない。適切な名称を考える余裕を持てぬまま、時代と共に目的の幅を広げてしまったようだ。

当初は、見えなくてもサインができなければ困るという、アメリカのハンドライティング訓練の直輸入であった。先天全盲者の手を持ち、鉛筆の持ち方、力の入れ方、線の引き方、止め方を指導し、レーズライターを使って自分の名前が書けるように訓練をした。中途視覚障害者は、周囲の人にメモや手紙として役に立てられるようにということを主眼としていた。

そのうち、筆者が点字訓練の担当をしている関係上、点字文が語音だけを表す文字記号であることに、物足りなさを感じてきた。更に、文章や言葉の理解そのものに、疑問を抱き出したのである。実際、漢字仮名まじりの日本語の文章の理解には、漢字に対する知識の多寡が重要な役割を持っている。成人してからの中途視覚障害者の場合、障害以前の読書経験の豊富さが、点字触読のもどかしさを補い得ることは確実である。たとえ読みやすい字が書けなくても、点字文を読みながら頭の中で漢字を思い浮かべられるだけで、充分意義があることを強調して、漢字に興味を持たせることを、すみ字訓練では第一に考えている。筆者自身、すみ字訓練は点字訓練の一部、または、点字訓練の補助的なものと位置付けている。

しかし、昭和58年以後、ワープロを使用するためには、どうしても漢字の知識が必要になり、漢点字を覚えてそれを使いこなすための練習として、すみ字訓練に熱を入れる訓練生が増えて来た。視覚的情報が全くないか、あるいは

不十分な訓練生達にとって、自ら手を動かして字を書き、確かめてみることは、とても大事である。手を動かしてみるとことにより、忘れた字を思い出すことが案外多いものである。更に、大半の訓練生がストレスの解消を自覚している。社会に出てからも、周囲の人々に気軽に聞いたり、確かめたりできる態勢を養つておくことも、この訓練の持つ重要な意義である。

Ⅰ. 組分けのための評価

受講人員が多いので、新入生に対してオリエンテーション期間中（入所後、約1週間）に、面接と書き取りを行って評価する。

1. 面接

面接は、コミュニケーション全般（点字・カナタイプ・すみ字）として、一人約5分程度行うが、すみ字に関する事項は次のような事柄である。

- ① 現在及び障害前の視力、特に小学校時代の視力。
- ② 読み書きが不自由になってからの期間。
- ③ 障害前の職業。
- ④ 読書が好きか嫌いか。
- ⑤ 将来の希望。

2. 書き取り

書き取りは、数人（6～10人）同時にを行う。約50分の内容は次の通りである。

- ① すみ字訓練の内容及び意義説明。
- ② すみ字用紙（日本ライトハウス販売のもの）3種類を一人ずつ触らせ、各自2種類選ばせる。同時にHBの鉛筆を1本ずつ配る。

☆ 線を浮き出させたすみ字用紙（日本ライトハウス訓練センター購買部で販売）。中途視覚障害者用として、行間1cmで16行のものと、行間1.5cmで11行のもの、先天視覚障害者及び、弱年中途視覚障害者用として、1辺1.5cm、10×15のます目の浮き出し線のものがある。すべて縦横いずれでも使用可能。

- ③ 左手の誘導の要領を、縦書き横書きそれぞれ説明する。

☆ 縦書きの要領。書く行の左側の浮き出し線に、左手の人差し指の先を当てて、右手の鉛筆の先でその指頭を確認して1字書き、1字ごとに左手を1字

分手前に線をたどって移動させて、鉛筆の先で確認して次の字を書く。以上繰り返しながら、一番手前の横線に左人差し指が触ればその行を上の横線まで戻り、上の横線に沿って左に1行移動する。

☆ 横書きの要領。書く行の上の横線に左手中指の先、下の横線に左手人差し指の先を当てて、右手の鉛筆の先でその2指頭間を確認して1字書き、1字ごとに左手を1字分右に移動させて、それを鉛筆の先で確認しながら書き進め、行末の縦線まで進めて次の行に移る。

④ 先ず1行目に訓練生本人の氏名を書かせる。この時、現在視読し得る弱視者には、最小限度の字で書かせる。

⑤ 各自の住所、日本ライトハウスの住所を書かせる。漢字は知っている範囲使用するよう指示する。

⑥ 書き取りドリルを使用して、日常的又は、社会的に常識な程度の短文を読んで書き取り10~15問行う。短文ごとに行は変えないように指示し、各行いっぱいに書かせる。

書き取りにおける評価項目は次のようなものである。

- ① 現在の視力。
- ② 短文の記憶力。
- ③ 字の大きさと字体。
- ④ 漢字の知識と、送り仮名の付け方。
- ⑤ 左手の誘導、及び右手との協応性。

Ⅲ. 組分け作業

現在は、訓練生（当施設は、職業訓練25名、生活訓練70名が定員）を次の5組に分けている。一クラス12~15名である。

A) 全盲弱視を問わず、障害前読書経験が豊富であり、常用漢字は大体駆使可能な人。

B) 障害前読書が好きであっても、障害後のブランクが長い全盲者。漢字の新字体を使用せず、旧字体を使用する全盲者及び弱視者。常用漢字の習得が中途半端であり、ワープロのため常用漢字を習得希望の視読可能の弱視者。

C) 漢字に興味を持たなかった者。障害前に読み書きの習慣の乏しい全盲者及び弱視者。

D) 小学校の途中で点字に切り替え、教育漢字を習得希望の全盲者、及び弱視者。

E) 先天全盲者、及び先天弱視者で、当訓練センターに入所後、先天視覚障害者のすみ字訓練で平仮名、片仮名、漢字の部首を覚えた者。

以上の5組であるが、学期により、A及びBが多く、3組になる場合、C…D・Eを2組にする場合もある。

IV. 訓練内容

各クラスそれぞれに合わせた、短文の書き取りドリルを使用して書き取りを行う。50分授業を週1回行っている。

使用する用紙は、全盲者は上記すみ字用紙、弱視者はその視覚に応じたメモ用紙、いずれも各自が用意する。

筆記用具は、全盲者はHBの鉛筆を使用させる。弱視者のうち、1.5cm角以内の自筆の字が視読可能者のみ、ボールペン使用を許している。マジック・サインペン等は、机や本人の指頭についた場合落ちにくいので、授業中は使用させていない。HBの鉛筆は当訓練センターで常に用意して先を削って貸し出している。

消しゴムは、視読可能者で必要な場所が消せる者のみ使用を認め、他の者は大き目の×印で消させている。但し、3字以上書き進んでから間違いに気付いた場合は、消さずに、もう1度書き直すように指示している。

V. 訓練中の指導法

毎時間1行目に氏名を書かせる。

短文を読み上げて、分からぬ字は遠慮なく質問させる。

使用漢字の説明は、次のような段階を追って説明する。

- ① 音読訓読の読み替え。
- ② その字を使用した他の熟語、又は固有名詞を示唆。
- ③ 似た漢字の変える部首を示唆。

- ④ 書き順に従って部首名で指示。
- ⑤ 部首の覚えられない者には、一般的な分かりやすい字の中から同じ部首を選び、その説明をし、書き順に従って、横一とか縦一とか書き方を説明する。
- ⑥ 訓練生の指を持って、机の上に書かせながら説明する。

A クラスでは、①の段階で殆ど進行して行く。B クラスでは、②～④の段階まで、C・D・E クラスでは、漢字によって③～⑥までいろいろ使い分けて行く。

更に、送り仮名の付け方、語尾変化の仕方、その漢字の違った使われ方など、同じ漢字に対する質問を繰り返されてもあきらめず、何度も各方面から説明を繰り返し指導する。C・D・E クラスでは、同じ旁で偏の違う漢字の説明や、横棒 1 本の違い、縦棒が出るか出ないかの違い、当て字の滑稽さなど適当に雑談しながら、漢字に対する興味を持たせることが最も大切である。

Ⅶ. 訓練生に与える注意事項

- ① 字の間隔がつまり過ぎ、または離れ過ぎる場合。左手を持って 1 字分の移動を覚えさせる。体得するまで何回でも繰り返すこと。
- ② 偏と旁が離れる場合。再三注意して意識付けることと、場合によっては行間の狭い用紙で縦書き練習をさせて、効果を得る時もある。
- ③ 字体が荒くてくずれる場合、平仮名を続け書きする癖の場合。急がせず、1 画 1 画を丁寧に書くよう注意する。子供に教えるつもりで書くように意識させる。
- ④ 行が飛んだり、同じ行に重ね書きをする場合。左手に対する注意が定着するまで、何度も声をかける。
- ⑤ 字が小さ過ぎる場合。あまりきびしく注意せず、なるだけゆっくり書かせて、リラックスできるまで気長に待つのがよい。
- ⑥ 忘れた漢字、知らない漢字を、質問するのを恥ずかしがる場合。初めのうちは手元を見ていて、困っている様子を探りながら、記憶を引き出すように援助をする。そして、晴眼者でも読むことはできても書けない人が多い現実や、目からの情報がなくなれば忘れていくのが自然だということを、何度も話して

リラックスさせ、質問しやすい雰囲気を作ると同時に、忘れること自体を自覚させ、それを意識して周囲の人聞いて確認すれば、阻止できることを説明する。

⑦ 視読可能な場合。その訓練生がはっきり確認し得る字の大きさを確かめて、筆ペンかサインペンを使用して、訂正して次の時間に返却する。その場合に自己の文章の間違った箇所が探しにくい視力の訓練生には、熟語にしたり、送り仮名をそえておく方が分かりやすい。

⑧ 姿勢で注意をする場合。視読不可能となった弱視者及び全盲者には、うつむかないよう再三注意する。視読可能な場合、本人が眼の疲労を感じる訓練生には、手元を見ないで書く訓練をする。しかし、視覚の変動の虞がなく、疲労感もなく、手元を見ることにより美しく書け、間違いに気付いて訂正のできる場合は、机と眼の距離が3～5cmでも放置している。

⑨ 卒業前の面接の際、各訓練生にすみ字訓練の成果をはっきり評価し、手紙やレポートなどに通用するか否か、メモ程度なら役に立つか否かを自覚させる。更に、時々周囲の人に読みにくい箇所がないかどうかを確認することも助言してておく。

⑩ 各学期末最終授業時に全員に注意しておくこと。点字本を読みながら、或はラジオ・テレビを聞きながら、努めて漢字を頭に浮かべること、そしてそれを指先または鉛筆で書いてみると、忘れたり、あやふやに感じたら直ぐ周囲の人に確かめること。特に時代と共に新しく造られる省略語は、全体を正確に聞いておくことなど。

⑪ すみ字訓練各授業終了後、鉛筆で汚れた左手指頭を石鹼で丁寧に洗うように習慣付けること。

Ⅳ. 学期末に行なう次の学期の組分けのための評価

訓練生に与える評価とは別に、その学期を通して観察評価する項目は次のようなものである。

- ① 語彙の多寡、漢字の知識、漢字習得能力。
- ② 短文の記憶力。

- ③ 言葉に対する配慮の有無。
- ④ 字体に出る精神状態、及び性質。
- ⑤ 左手の右手に対する協応性。
- ⑥ 左手指先の巧緻性。
- ⑦ 自己の現実の受容度。

以上の評価に点字訓練の評価を参考にして、次の学期の組分けを行う。

VII. すみ字訓練担当者が注意すべきこと

視覚的情報が皆無あるいは限定された状態にある視覚障害者が、漢字を忘れることは当然である。また、幼少時から弱視のために漢字を曖昧に覚えていることも無理のないことである。これらの事実を常に根底に置き、何度も説明を繰り返すことが大切である。そして特に中途視覚障害者の多くが持つ、漢字を忘れるこの情けなさ、恥ずかしさ、腹立たしさを取り除き、自信喪失を克服させて、自ら忘れるのを防止する方向に意識を向けるために、援助するのがこの訓練である。

視覚を失っても、言葉や文字に対する好奇心を失わせないために、漢字に対する雑学の吸収を心掛けて、訓練生の緊張をほぐし、漢字の持つ意味や使い方に興味が持てるよう、工夫と努力を続けたいものである。